

佳作

また笑顔が見られますように

岡田 真那美

将来、私は人の命を救う手助けをする看護師になりたい
 と思います。

そんな私には、C型肝炎、糖尿病、乳癌と三つの病気
 と闘っているおばあちゃんがいます。

私をはじめておばあちゃんの病気の事を知ったのは今
 年の二月くらいでした。

その時はまったく気にもしなかったし、おばあちゃん
 も病気にかかっている風に見えないくらい元気だったか
 らです。

私の家からおばあちゃんの家までとても近かったので
 毎日のように行っていました。

おばあちゃんの家に行けばおばあちゃんは、庭の手入
 れをしていて笑顔で「いらっしやい」と迎えてくれまし
 た。

時々、庭の手入れを手伝って花の手入れの仕方を丁寧
 に教えてもらいました。

そのおばあちゃんとの庭の手入れの時間はとても心地
 良い時間でした。

夕食になればとてもおいしい料理を出してくれまし
 た。なんだっておばあちゃんの南蛮漬けは絶品です。私
 はおばあちゃんの南蛮漬けしか食べられません。そのくら
 い大好きでした。

ご飯の後も皿洗いをしたり色々手伝いました。その後
 もおばあちゃんは「ありがとね。」って笑顔をむけてく
 れます。

そして何もする事がなくなれば驚くほど話す事がなく
 て。でも、二人でいる部屋から離れようとする訳でもな
 くだだテレビを覗いているだけの嫌じゃない不思議な時間
 でした。

そんな時、おばあちゃんは、

「真那ちゃん、真那ちゃんは友達に悪口言われたり、いじわるされた事ある？もしあるんならお母さんでも誰にでも相談しなさい。一人で悩んだらいけん。だけ、真那ちゃんも人に嫌なことしたらいけんよ？空に向かってつばをかけたらつばは自分に戻ってくるやろ？それと一緒に。悪い事すれば悪い事が帰って来るし、良い事すれば良い事が帰って来るんよ。」と説得力のある眼差しで話してくれました。

もちろん怒られた事だってあります。

私は話す声がとても小さいのでおばあちゃんに、「声が小さい!!おじいちゃんに似てから」と笑われながら怒られました。

声が小さいと怒られたのは数えきれない程あるのでもう慣れてしまってる私もいました。

そして、夏には毎年、戸畑祇園という戸畑の祭りにはおばあちゃんと親戚と行きました。祭りの時のおばあちゃんはとても楽しそうで山笠を担ぐ男の人達の掛け

声にあわせておばあちゃんも「ヨイットサ！ヨイットサ！」とテンションはMAXでした。その場に友達もいたしお酒も飲んでいたのでと思います。そして飲みすぎればお母さんの妹が、

「お母さん！飲みすぎよ！もうやめとき！」とお怒りを受けるとおばあちゃんは、

「なん言いよんね！まだちよつとしか飲んどらんっ！」と反抗すると「あなたがちよつとねっちゃ！そーと飲んどるやんねっ！」と言いつ返してプチ喧嘩しているとお母さんとおばあちゃんの友達は「まあまあ」となだめている光景が大好きでした。皆、祭りのテンションなんだなあ。と思うとおかしくてたまりませんでした。

ちよつとしか飲んでないはずのおばあちゃんの足は見事な千鳥足で早口で何を言っているのか分からない言葉を発しお母さんの妹に毎年毎年うざ絡みをした後、一人で静かに布団の中に消えて行きました。

そして、門司港の花火大会には毎回連れて行って来れました。

花火はおばあちゃんの友達が住んでいるマンションでとてもキレイにみさせてもらいました。

花火が始まれば、皆は花火に見とれてしまい口数はいっせいに減りました。

花火が終わればおばあちゃんは「キレイやったね。また来ようね。」と言ってくれました。それに私は、「うん！また連れて来てね。」と、毎年花火大会が終わった後はこんな会話をしていました。

そして、暑い夏が終わって冬が来るとおばあちゃんはあまり庭の手入れはしなくなり、家の中でできる奈良漬けや床漬けの手入れをしていました。

おばあちゃんは自分で作った奈良漬や床漬け、キムチや高菜を人に配るのが好きみたいで、それも全部好評でした。

十二月の終わりに私の誕生日が来ると、朝起きておばあちゃんが一番最初に、

「おはよう。お誕生日おめでとう。」
と笑顔で言ってくれました。

そして、自分の家に帰る時に

「お誕生日おめでとう。おやすみ。」

と言ってくれていました。

そんな小さな事でもとても嬉しかったんです。

お正月になれば私はお母さんに叩き起こされて、まだ半分寝ている私に

「ほら、おばあちゃんとおじいちゃんの家に行くよ！」
と言われ、のそのそ私は準備をして車でおばあちゃんの家に向かいました。

五分程で到着して家の中に入るとリビングでおばあちゃんとおじいちゃん、そしてお母さんの妹が「あけましておめでとう。」と出迎えてくれました。

そして、おじいちゃんが、

「はい、真那、ここに座わり。」と言って、このパターンは毎年同じだったのですが座わりました。

おじいちゃんとおばあちゃんは私に、

「今年もよろしくね。」と言ってお年玉袋をくれました。そのお年玉袋はいつも可愛かったのでそれも楽しみ

でした。

親戚の家にいくと既に親戚が集まっていてお酒を飲む人が多いのですが、大人達のテンションは高くなりましてた。

大声をあげて爆笑する女性陣と趣味や妻の陰口を真剣ながらも小さい声で語る男性陣、それに、カルタをしたり喧嘩して泣いている子供達で家の中はメチャクチャでした。

でも、そんなお正月を皆、本当に楽しみにしていたと思います。私もその中の一人です。

そして帰る時に「またね!」とか「お兄さん、今度は男だけで飲みに行きましょうよ!」とか「これ忘れて行つとるよ!」とかでなかなか帰れませんでした。

おばあちゃん達を家に送る時も酔っている声で「あゝ、楽しかったあゝ。」と声を漏らしていました。

私は、今年もいい一年になるんやろうな。と思っていました。が違ったみたいです。

おばあちゃんの体の調子が二〇十四年の四月ごろから

急激に悪くなりました。

乳癌です。

四月ごろから五月の半ばまではキツイながら私も含め孫のめんどうを見ていてくれました。

私が「無理せんていいよ。お血は真那が洗っとくけん、あっちでテレビ観よき?」と手伝おうとしても「いいよ、あとちよつとで終わるけ、ありがとね。」と笑顔で返ってきました。

おばあちゃんは本当はきつかったはずなんです。でも、おばあちゃんは私達に一切きつそうな顔を見せてくれませんでした。

それなのにご飯の用意手伝うよと言ってもお血洗うよと言っても何か手伝う事がないか聞いてもおばあちゃんはまだただ笑顔で、

「ありがと。でも、いいよ。ありがとね。」と返してきました。そのおばあちゃんの笑顔で心が痛む時もありました。

その心の痛みは、せつかく手伝おうとしたのに断られ

たとかの痛みではなくて、無理してまで私達の前で元気なふりをしなくてもいいのに。という感じでした。

おばあちゃんは寝る回数が増えましたが、笑顔はそのままでした。

私達に向けてくれる笑顔は変わっていませんでした。

でもある日、おばあちゃんの左胸を見て驚愕しました。おばあちゃんの左胸は膿んで、赤紫のような色になっている部分がありました。

膿んでいる所から出血し、おばあちゃんの服は真っ赤になっていました。

そんな状態でも病院に行かなかったのは、おばあちゃんが二十代の頃、C型肝炎にかかりインターフェロンという薬を使ったのですが、副作用が強すぎて最後まで治療する事ができませんでした。

その怖さとお金の心配もあり病院に行く事ができなかったみたいです。

なので、おばあちゃんの状態は悪化していくだけでした。

そして、おばあちゃんの胸から血の止まる事はありませんでした。

だからおばあちゃんは胸にナプキンをずっと当てていました。

おばあちゃんは乳癌なのでやっぱり乳癌の匂いもしてきました。

その匂いは鼻を突くような匂いで、おばあちゃんがいる部屋にいるのもツライ程でした。

でも、その匂いを臭いと思っている自分が嫌いでした。

おばあちゃんは好きでこの匂いを出している訳じゃないのに、なに自分は何もきつい思いもしていないのに臭いとか思ってるんだ。とずっと思っていました。

でもお母さん達は「これはしょうがないよ。」とってくれていましたが、それはおばあちゃんに申し訳ありませんでした。

だから、昔みたいに何も話す事もなければテレビを観て笑う事も無い時間をおばあちゃんがベッドで横になっ

ている部屋で私は体育座りしていました。

横になっているおばあちゃんが私に「お水を取って来て」と言っていて私がお水を渡すといつものように「ありがとう」と言ってくれましたが、その顔に笑顔はありませんでした。

笑う余裕がない程キツかったんだと思います。

でもそれなのに朝は私達より先に起きていてくれます。

笑顔は減りましたが、相変わらず私はおばあちゃん「キツイ」は聞きませんでした。

お母さん達が「それ私がするけい いっちゃ」と言っても「それくらい自分で出来るっ！それもせんやったら何もできんくなるわっ！」と言うばかりでした。

強よがっていたのかもしれないけど、歩く時は壁に手を当てて歩いて歩くペースもゆっくりでした。

おばあちゃんの左胸からは常に血はでていて、出血がひどい時には三、四人で血を止めました。一人は血を止める物を探して持って行き、一人は血のついたシャツを

洗いにだして血を止めるために使ったティッシュを捨て、一人は血を止めるためのパットを隣の部屋に取りに行き、もう一人は胸から流れる血と体についた血を拭くという感じでした。

でもその仕事は決まっているという訳でもなく、急に血がでるのでとっさに自分のできる事は何かと考え、これだと思ったのが血を止める物を持って行く、血を止めるためのティッシュを捨てるでした。

やっぱり血を止めたりするのは大人で、ただ私はそれを見ているだけでした。

そんな私におばあちゃんは、

「真那ちゃん、看護師になりたいならこんなグロテスクな物も見られないけんかもしれんよ？おばあちゃんので慣れとかなね。」と笑いながら言ってくれました。

それに私は「大丈夫ー！」としか言えませんでした。

まず、自分の胸をグロテスクと笑いながら言った事にビックリしたからです。

私はおばあちゃんの胸を見て痛そうとは思った事はあ

りますが、グロテスクとは思った事がありませんでした。ただ単に私がそう思いたくなかっただけなのかもしれません。

血のついたティッシュを素手で触るのにも抵抗はなかったですし、血も意外と見れました。

もしそこで嫌な顔をしてしまえば、おばあちゃんを傷つけてしまうかもしれないとも思いました。

それに、お母さんから、

「もし、おばあちゃんももし死んだ時に、あんたがもつと手伝えはよかった。何であの時素直にせんやったんやろっち後悔したくないなら、私はおばあちゃんの助けになる事をしとったほうがいいんやないかなち思うけどね。」って言われてからおばあちゃんのために頑張ろうと思ったのと、ああ、おばあちゃんはもうすぐで死んでしまうのか。とこの二つがでてきました。

時々、おばあちゃんの元気がなさそうな所を見ると、あれ。今自分はおばあちゃんに元気になってもらうためにおばあちゃんの手助けをしとるんやか。それとも、お

ばあちゃんが死んだ時に、あの時おばあちゃんの手助けしてやれとってよかった！って後悔しないように今をすごしとるんかな。って考えました。

元気になってほしくておばあちゃんの手助けをしている自分もいれば、もしおばあちゃんが死んだ時、後悔はしたくないから手助けしている自分もいました。

でも、後悔したくないから手助けをしているのはおばあちゃんのためじゃなくて、自分のためにやっている事になってしまふから、その事はあまり考えませんでした。

そしてある日から、おばあちゃんの左うではパンパンに腫れて胸の痛みがでてきたようでした。

おばあちゃんが痛み止めの薬を飲んでいる時、私は水を運ぶことしかできなくて、今おばあちゃんが痛いのは分かっているのに乳癌について無知な私はどうする事もできなくて、インターネットで乳癌の痛みの止め方を調べてみて家ではできない方法しかでてこなくて、今は役に立てないな。と心の底から思いました。

だから、なんで今自分は中学生なんだろうとばかり思っていました。

私が車を運転できる歳ならおばあちゃんの行きたい所に連れて行ってあげていろいろな思い出と一緒に作る事ができたのかもしれない。遠い所へ旅行に連れて行ってあげて、病気の事なんかちょっとの間だけでも忘れさせてあげたのかもしれない。おばあちゃんの大好きな買い物に連れて行ってあげたかもしれない。たいくつな毎日から楽しい毎日に変えてあげたのかもしれない。

そして、私が働ける歳になっていけば、貯金していたお金を役に立たせる事ができたのかもしれない。そのお金で病気をすぐ治してあげたのかもしれない。そのお金で病気にいい物を買ってあげたのかもしれない。そして、体にいい物を買ってあげたのかもしれない。

でも、今の私は妄想で終わるだけで実行はできませんでした。

だからそれが本当に悔やしくて悔やしくてたまりませ

んでした。

大人達は、私の妄想で終わる事を全てやってしまっています。ただ私は、それを手伝えるわけでもなく、見ているだけでした。

しゃべる事も苦手な私は、おばあちゃんを笑わせてやる事すらできないし、おばあちゃんの暇をつぶす事さえできませんでした。

話しかけてきてくれても、私は「うん。そうやね。」と返す事しかできませんでした。だからその後、何でもっとしゃべらんやったんやろって自分にイライラしてしまう時もありました。

ちっちゃな事じゃなく、大人みたいに大きい手助けは何かできるやろうかと考えても、私が考えるかぎりでは何もありませんでした。

だから、今年で二十歳になった親戚がともうらやましかったです。

おばあちゃんと、「何色の振り袖がいいと思う？」という会話がうらやましかったのもあるけど大人になっ

た姿を見せれるというのがとてもうらやましかつたです。

私が大人になる姿をおばあちゃんに見てもらうのは無理だろうと思ったからです。

だから私は、いいなあ。って思いながら二人の話しを聞いていました。

そして、ある夜に私がリビングで勉強していて、もう寝ようかな。と置いていた時、おばあちゃんがトイレに行くためにリビングを通ったのでトイレ終わるまで電気つけて待つとこう。と思ったので待っていました。

そしたらトイレから出て来たおばあちゃんが「ありがとう」と言って部屋に戻って行きました。

その時、私はよく分からないけど、泣いていました。悲しくもないのに泣いていました。

私は、電気を消して歩いたら危ないだろうと思って待っていたんです。それにおばあちゃんは気付いてくれたのかと思って、うれしくて泣いてたんだと思います。

私はいきなりの「ありがとう」にこんな破壊力がある

のかと思いました。

その後も今、おばあちゃんはキツいんよね。痛い所がいっぱいあって薬がないと痛くてたまらんのよね。と考えるとまた涙が滝のようにでてしまつて。でも、泣いてるのがおばあちゃんにバレたら心配かけてしまうからタオルを噛んで声がないように泣きました。

それから、寝れなくなつて朝の四時まで何もする事なく座っていました。

その時もずっとおばあちゃんの「ありがとう」が頭から離れずに、これからおばあちゃんの役に立てるような事していこ。と思いました。ただ、おばあちゃんの「ありがとう」が聞きたかっただけかもしれないけど役に立ってないと思つた私には凄く嬉しかったんです。

そして、六月に入るとおばあちゃんの体調は今までの倍に悪化していました。

声もでなくなり、寝ている回数は前より増え、笑顔は消えました。

話しかけてもおばあちゃんはずくだけでした。

ご飯を食べる時は一口一口がとてもおそくて、食べるのさえもキツそうでした。

お米は、私の三口ぐらいの量を一口だけ食べて終わっていました。

お母さん達がちゃんと食べなと言ってもおばあちゃんは首をふるだけで残りを食べようとしませんでした。

食べる力が出ないくらいだったからとてもキツかったんだと思います。

食べ物を食べないから痩せていくし、血は増えないし、体調は良くなるはずもなく最悪でした。

こんな状況ではおばあちゃんが危ないとお母さん達が話し合いやおばあちゃんを病院でみてもらうという事になりました。

病院の先生に色々みてもらって分かったことは、ご飯も少量しか食べず、胸から出血していた分の血液を作れてなかったため、おばあちゃんの体に三分の一の血液が足りていなかったそうです。

病院の先生も「よくこの状態で倒れずにすんだ。」と

言っていました。

そして、病院の方からは二つ薬をもらっており、一つは「胸に痛みを感じた時に飲む薬」そして、もう一つは「それでも（一つ目の薬を飲んでも）痛みを感じた時に飲む薬」でした。それでも痛みを感じた時の薬を飲んでいる姿を見ると、今おばあちゃんは痛そうな顔をしていないけど、私達には分からない激痛に一人で耐えているんだなと思っていました。

その時はただ思う事しかできなくて、痛くて大丈夫じゃないからその薬を飲んでいるのに私はおばあちゃんに「痛いん？大丈夫？」としか聞けなくてただただ悔しかったです。

でもおばあちゃんは小さな声で、

「あんま痛くないよ。大丈夫。」と言ってくれました。

こんな状況でも強がってくれていました。

何でおばあちゃんの声がでている時にもっと話をしたいなかったんだろう。何でもっと聞きたい事を聞いていなかったんだろう。ととても後悔しました。

その夜も皆が寝た後バレないように泣いていました。

おばあちゃんが死にそうな状況でいるという事を認めたくなくても私の目の前ではとてもツラそうなおばあちゃんがいる。

なにも認めたくないワガママな自分でした。

でも、そんな事をお母さんに相談するということは絶対にイヤでした。

まず、泣いてるということを知られたくなかったからです。

お母さん、お母さんのお兄ちゃん、妹、そしておじいちゃんの方が泣きたいはずだったからです。

私には大好きなおばあちゃんでもおじいちゃんには大切なたった一人の妻。お母さん達には大切なたった一人のお母さんのように存在の大きさが全くちがうと思ったからです。

そんな大切な人が今にも死にそうな状況でも泣きたい思いを抑えておばあちゃんの体の改善に全力で尽くしているのに私が泣いている所をみて、お母さん達を今まで

以上に泣きたい思いにさせてしまっただけだと思っただけから泣いている所を見られるのはイヤでした。

泣いた夜の次の日の朝はあたりまえのように目は腫れてお母さんに寝すぎと怒られました。が本当にバレたくなかったから素直に怒られました。

でも、そんなある日に、私が塾から帰るから迎えに来てとお母さんに電話した所、今おばあちゃんの家を出たという事でした。

それに私は「何で早く来んやったん!?もつと早くでたらよかったやん!早く来てよ!」と怒鳴っていたらお母さんは「うん。ごめんね。今行く。」とだけ言って電話を切りました。

それから十分経ってやっとお母さんの車が来ました。私は車の中でも「何でこんな遅かったん!!塾で最後やったんやけど!」とまた怒鳴っていたらお母さんが小さな声で、

「あんね、さっきまでね親戚のおばちゃん来てってね、おばあちゃんの事で話しよっておばあちゃんおこさ

んように泣きよったんよ。」と返って来て私は馬鹿だ
なと思いました。

お母さん達の事情を知らないでなに自分の都合おしつ
けて怒鳴りちらしてたんだと思いました。

そして、ちよっとしてお母さんが、

「おばあちゃんさ、今頑張りよるけどさ、治るかわか
んのよね。でも私達が出来るかぎりの事はしよ。頑張ろ
うね。」と言われて、私は初めてお母さんの前で泣きま
した。

無意識にも私の口からは「大丈夫やないのわかつとる
のに大丈夫？としか言ってやれん。」と言っていました。
それにお母さんは「いいやん。それで十分よ。」と
言ってくれました。その言葉でちよっただけ楽になった
気がします。

そして、何日か経ってお盆の日、おばあちゃんの家に
親戚が二十九人も集まりました。

わざわざ東京からも来てくれたみたいですよ。

すごく騒がしかったです。

大人達は親戚内のウワサとか子供達の学校であった事
件などでとても盛り上がっていました。

お酒も二箱くらい買っていましたでしたがほとんどが消えま
した。

そして、お酒が完全にまわれれば、男女での言い合いが
始まり、私達、子供はヤレヤレとそれを観戦していまし
た。

その言い合いも内容がしょうもなく、おもしろかつ
たです。

私の家の家系は女家系で女が多かったのもあるから話
の内容がしょうもなくとも迫力はなぜかありました。北
九州の方言が入ってたからかもしれません。

おばあちゃんも楽しそうでした。

久しぶりに声を上げて笑っていました。

お母さん達に「ちよっただけやけねっ！」と言われ
ながらお酒もちよっただけ飲んでいましたし、ご飯も
ちよっただけ食べてました。

大人達は十一時くらいまで飲んでベロベロになってい

ました。

親戚が帰る時におばあちゃんを抱きしめて、「おばあちゃん。来年の五月にまた来ますから。それまで、元気でいて下さい。」と泣きながら消えそうな声で言ってくれていました。それにおばあちゃんは、

「うん。大丈夫。待っとくね。」と笑顔で答えています。

その後、飲んでいなかったお母さんが皆を送っている間、おばあちゃんが私に、

「今日はありがとうね。スープ作る時に一番めんどくさい作業一番最初に食べてねって言ったのに一番最後やね。ゴメンね。」

「いや、いや、いいよ！楽しかったけん。」と話しました。

スープとは、おばあちゃんの得意なテールスープの事でめんどくさい作業はそのスープに使う野菜を泥が完全に落ちるまで洗うという作業です。

一人、台所に立って数えきれない程の野菜を洗う訳で

すから正直キツかったですが、おばあちゃんのためならいっかと思ったり、親戚も美味いって言ってくれたので良かったです。

そして、このお盆に改めて思ったのは、おばあちゃんは愛されてるなという事です。

遠くからおばあちゃんに会いに来てくれる人。孫の旦那さんの家族から「大丈夫ですか？元気になって下さい。」とくだものを送ってくれる人。おばあちゃんの友達に言えば、必ず「おばあちゃん大丈夫なんね!」と心の底から不安そうな顔をして心配してくれる人。別れ際に「おばあちゃんの事、頼むね。」と声をかけてくれる人。

そして、おばあちゃんの一歩近くには全力でおばあちゃんが苦しむ事ないようにと治療に励む人。

おばあちゃんには本当に大切にされて愛されているなと思います。

私だったら死にたくても死ねないな。と思います。

でも、おばあちゃんはある日の夜に激しい胸の痛み

襲われ、病院に運ばれました。

先生が出した答えは入院という事でした。この時、親戚ふくめ私達家族は「ああ。もうおばあちゃんが死んでしまう。」と思ったみたいです。

おばあちゃんが自分の事で一番大事にしていた髪も次々に抜け、痩せ細っていき、元気という言葉が当てはまりませんでした。

それに、おばあちゃんの目をみるだけで元気じゃないなど分かる程でした。

毎日毎日、病院に行っても腕に点滴をつけたキツそうなおばあちゃんしかいませんでした。

いろいろと話しかけてもうなずくだけで、今までのおばあちゃんの笑顔が嘘みたいだと思ふ程その時のおばあちゃんから笑顔はみれませんでした。

キツそうなおばあちゃんに会いに行くのは正直ツラかったです。

良くなっていく姿はみられなかったし、そんなおばあちゃんをみてその場の空気を暗くさせないように笑顔で

いなければいけないと思ったし、自分の力では、おばあちゃんを笑顔にすることができなかったからです。

そんな時、病院の先生からこんな話ができました。

「ガンを殺す治療で抗がん剤治療と放射線治療があるのですが試してみてもどうでしょう。そして、この2つの治療を効果的に行うようにする物で酸素カプセルという物も使います。完全に治るとは言い切れませんが、歩けるまでには回復すると思います。」とのことでした。

その話に、家族達は迷う事なく「よろしくお願ひします。」と答えました。

でも、その治療はおばあちゃんにとって楽な事ではありませんでした。

週に二、三回程その治療を行い一日の中でこの治療を何時から何時まで、そして何十分経ってから他の治療をするために治療室へ移動というように病室でおばあちゃんと話す時間はなくなりましたし、本当にこの治療をしていいのかと思う程おばあちゃんはキツそうでした。

しかし、何週間か経っておばあちゃんの病室のドアを

聞けると小さな声ですが「いらっしやい」と聞こえました。

そしてそこには笑顔で私達を迎えるおばあちゃんがいきました。

私は、とてもビックリしました。

キツすぎて声すら出せなかったおばあちゃんが突然声が出せるようになってるし、しかも笑顔まで！とあたり前の事なのに今まで手に入れたかった物をやっと手に入れる事ができた時のような気持ちになりました。

病院の先生達がとても良くしてくれていたみたいですよ。

おばあちゃんは治療を受けて魔法をかけられたように元気になりました。

病院食をキツそうに食べていたのに今になっては「ビール持って来て」と笑いながら冗談を言えるようになっていました。

そして、ついに退院しても大丈夫ですよと言う話が出ました。

私はまさか死にそんな状況だったおばあちゃんが退院できるとは思ってもいませんでした。

その後日、おばあちゃんは今までいた場所に帰って来ました。大量の薬と共に。

やっぱりおばあちゃんの体は完全に治ったわけじゃありませんでした。

朝、昼、ご飯を食べた後、ねる前とたくさん薬を飲んでいましたし、昔よりは減りましたが胸からの出血はありました。その時もすっかり手伝わせてもらいました。

でも、胸を消毒したり洗ったりするのは大人が全部してくれていました。私はそれを見ただけでした。

退院してからおばあちゃんは、退院してからの大切な事をやりはじめました。

まず一つは入院していた間ずっと心配していた奈良漬けの手入れです。

夕方の五時くらいから私とおじいちゃんとおばあちゃんの手をくさくしながら大量の酒カスの中に手をつっこんで、うりとキュウリと大根を出して今まで漬けてた酒

カスをきれいに拭きとってまた新しい酒カスが入った大きな樽に入れ直しました。それを座って約三時間の作業ですからあたりまえのように腰とお尻が痛くなりましたが、あぁっ！もうやめてやる！とはなりませんでした。だって、久しぶりのおばあちゃんとの作業だったからです。

そして二つ目は庭の手入れです。

大好きな花に水をあげたり、雑草を抜いたりニラを収穫したり、「この花はね」と私の知らなかった事を教えてくれたりとても楽しかったです。

三つ目は、やっぱりやめられないお買い物です。スポーツ用品店に行ったりハビリに使うクツを真剣に選んでいました。

そして次に杖を買いにイオンに行きました。理由は分りませんが人に杖を選んでもらったらいけないらしくてキレイな花柄の杖を買っていました。

楽しかったみたいですが体力がなくなっていたので長時間外に出ているのはキツかったです。

家に帰ってちょっと休憩をしてさっそく買ったクツと杖でおばあちゃんは散歩にできました。その散歩に私はお供させてもらいました。

その散歩の中でいろんな話をしました。

学校であった事、家の近くで子猫が生まれたこと、そしておばあちゃんが退院するまでに家であった事など家につくのが早く感じる程夢中になって話しました。

そして家についておばあちゃんはベッドで横になって大好きな韓国ドラマを観ていました。

私が、「この人は何で泣きよん？」「この人達っちどうゆう関係なん？」と質問すると一つ一つ丁寧に「この人はこんな事をしてね」「この人とこの人が付き合ってたね。」と教えてくれました。

何もしてなくても私がいる空間におばあちゃんがいることが単純にうれしかったです。

なにせ死にそうなくらい胸の痛みに苦しんでいた人が私の近くで楽しそうに笑っているのですから。

薬を飲んでる姿をみると、あぁ。やっぱり病氣なん

だな。とは思いましたが笑っているおばあちゃんをみればそんな事はすぐにわすれました。

でも、何週間か経ったある日胸からの大量出血のせいでおばあちゃんは救急車で病院に運ばれました。

それを知らされたのは塾から帰る車の中でした。「はよ車乗って！」って言われただけでまたおばあちゃんになにかあったんだと思いました。その後すぐにお母さんが、

「おばあちゃんが病院に運ばれたけお母さんも行ってく
るけん！あんたは家でカギ締めとって待って！」と
言ってお母さんを送って車の少ない夜の道路で車をとば
していました。

お母さんが帰って来るまで寝れなかった私はすごく不
安でした。手術は上手く進んでいるのか、最悪の事態に
はなっていないか。

そして何より不安だったのはお母さんが泣きながら私
に電話をかけてこないかでした。

私はいつも携帯の通知の音がうるさくて音を消してい

たのですがその日の夜だけ音は最大でした。

そして夜の一時ごろお母さんから電話が来ました。

電話に出ると「今終わったよー。今帰るね。」との事
でした。

私はその電話を切ってホッとしたのと同時に数週間前
までの楽しかった事はもうないだろうと思いました。

そしてまたおばあちゃんは病院ですぐす事になりました。
た。

でも前の入院より元氣そうな顔をしていたのでよかつ
たです。

休みの日には絶対おばあちゃんに会いに行きました。

おばあちゃんに頼まれた物を売店までおつかいに行っ
たり、病室にあった車イスで病室をグルグル回っておば
あちゃんに何しよんねって怒られたけど、前の入院の時
みたいにどんよりした空気がまったくなかったので楽し
かったです。

病院食を少ししか食べれなかったおばあちゃんもおか
ゆ一杯を完食できるまでになっていたから、あ。頑張れ

ばまだ長生きできるんじゃないかなとか期待もしました。

胸のにおいも消えましたし、胸が膿んで腐っていた部分もきれいに取れました。

でも、どんなに初期より良くなったからって期待ばかりしても完全に治ることはないって事は分かってました。

それに、お母さんからも事前に「どんなに元気になっても乳ガン自体が治ることはないやろうね。」と話していました。

でもそんな話をしてからおばあちゃんと話したりする一つ一つが大きな思い出になっていっていると思います。

それに、おばあちゃんという時の大人達にも笑顔が増えました。

毎日が不安の塊でおばあちゃんと一緒にいる時はすごく笑顔で話していて「じゃあ部屋戻るね」とその場を去って私と一人の親戚がいた部屋に来て今まで見せて

いた笑顔は消え今までガマンしていたものが全部溢れて顔をグチャグチャにしながら「もう立ち直れんかもしれない」と泣いている所も何度かみました。それにも気づかないふりをしておばあちゃんは気づいていたんだと思います。

おばあちゃんも悲しい顔をしていたからです。

でも、今になってはそんな顔はみなくなりました。

まだ、治った！と思っても現実を叩きつけられてつらい思いをしていると思いますが、今現在の病室には笑い声が響き渡っています。

大人達の不安の塊りはちよつとずつ削れていってるんじゃないかと思えます。

薬の量はいいかかわらず多いけどおばあちゃんの苦しむような感じはみられませんでした。

ちよつとずつ、ちよつとずつの小さな変化でも、私は大きなよろこびでした。

そしていつものようにお母さんと二人でおばあちゃんの所に行くとき、おばあちゃんは自分の携帯で孫の動画を

みていました。

でも、おばあちゃんは私達が来たのに気づいてすぐ消してしまいました。

それをみて私はすごいモヤモヤした気持ちになりました。

自分達の前では楽しそうだけどやっぱり一人はさみしいよね。と思いました。

多分お母さんも気づいていたんだろうけどその事には触れてなかったので私も話していません。

その後、学校であった事やお母さんの会社であった事など一時間くらい話しておばあちゃんに「ありがとう。じゃあね」と送り出してもらって親戚と買い物に行きました。

その時に親戚の一人がいきなり、

「そう言えばさ、今おばあちゃんとかうやって晩ごはんの買い物したりさ、一緒に作りよったりがはつきり思いませんくない？」と言われました。それに私は「うん」と笑いながら答える事しかできませんでした。

でも、その思い出はもう実現する事はないし、そこに今までのおばあちゃんがない事は確かな事でした。

今、私の目の前に今までの事ができるおばあちゃんはいませんが、今度は私がおばあちゃんが家に帰って来る時に外で「おかえりなさい。」って笑って言えるように病気が良くなっていくために手伝っていいこうと思います。

だから、将来は私が出来なかった事を当り前のようにして頂いた看護師さんを目指し、最後には「お疲れ様でした。」と退院される方に誇りを持って言えたらと思います。

そして、おばあちゃんに「おばあちゃん。夢が叶ったよ。」と大きな声で報告できる日に向かってこの今を頑張っていくこうと思います。